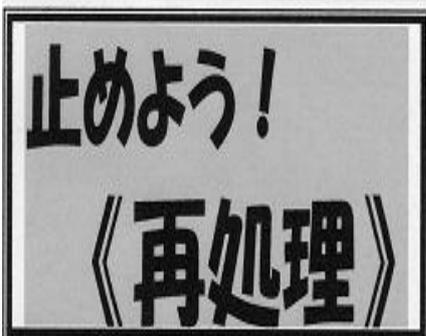


三陸の海を放射能から守る 岩手の会

郵便振替 02240-5-102650
ホームページ《再処理／岩手の環境》
[http://homepage3.nifty.com/gatayann/
/env.htm](http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm)



《天恵の海》

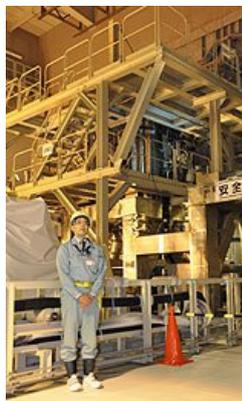
2013(平成25)年
10月22日
第133号
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX 019-623-1636

超危険物 六ヶ所再処理工場 高レベル放射性廃液をゼロとせよ! 大地震や津波は待ってられない



「ガラス固化技術開発施設」
この中に「新型炉実寸大模型炉」が作られました。模擬廃液を用いて研究します。

「新型炉の実寸大の模型」
新型炉は約一〇億円で開発中。
炉底を現在の四角すいから円すいに変更、傾斜も四五度を六〇度にし抽出口のノズル周辺に加熱用コイルを新設し流下性を向上させるといふ。



日本原燃は約一八〇億円を投じた「ガラス固化技術開発施設」が完成したと十月一五日に報道陣へ公開しました。二〇一七年導入計画の新型炉の開発研究やこれまで不十分であった作業員の運転訓練に活用するといえます。

「ガラス固化技術開発施設」を公開

日本原燃は七月に、五月に行った「A系列溶解炉」の高レベル放射性廃液のガラス固化試験が「安定的に運転できた」と発表しました。しかし、今回の「A系列溶解炉」の試験も、昨年「B系列溶解炉」の試験も運転期間が短く、「安定的に運転できた」と断定するには多くの疑問があります。今回発表された「新型炉計画」も四年後に成功するかどうかは全くわかりません。
私たちは原子力規制委員会が策定中の「核燃施設等に保われる新規制基準」へのパブリックコメントで「高レベル放射性廃液ゼロ」を要請しました。日本政府は、今こそ、大量の放射能を保有する超危険で巨額の財政負担を強いる再処理路線からの撤退を決定しなければなりません。

「溶解炉試験」報告

「運転試験」は評価できるのか？
日本原燃は国への報告書で、「五月八日から二六日まで『廃液供給十バッチ＋洗浄三バッチ』の試験運転を行った。その試験運転では、廃液の供給や温度管理を安定的に維持するためガラス溶解炉内の温度測定ポイントを新設し、溶解液上部の『仮焼層』下の温度の把握を適切に行い高温化による白金族元素の急激な沈降を防ぐことができた。模擬廃液とガラスビーズの溶液を定期的に組み合わせ実廃液を入れて流下を安定

(公益財団法人)
原子力環境整備促進・資金管理センター
(2013年3月末 現在高)
再処理等積立金 2兆5653億円
* <http://www.rwmc.or.jp/financing>

させた」と述べています。しかし報告書は未だに原子力規制委員会審査がなされていません。再処理は危険すぎ、しかも巨額な浪費である日本原燃(株)は日本の各電力会社からの出資金と長期借入金などで成り立っています。「再処理工場」には既に約二兆二千億円が使われました。政府は再処理のための法律を制定し各電力会社に積立金(以前は引当金)を拠出させる「再処理等積立金制度」を作り資金を準備しました。工場は各原発からの低レベル廃棄物の最終処分料や使用済み核燃料の保管料等で運営されていますがこの積立金の取り崩しである「前渡金」も始まっていると言われます。発電もしないのに、将来、「核燃サイクル」で発電の予定」というだけで、国民の電力料金から多額の資金徴収が認められているのです。日本経済への巨額な負担をもたらすだけです。

放射能のレベルが増大



「再処理工場の工程」

1 原子力発電で核分裂したウラン燃料は「使用済み核燃料」となり、冷却プールで冷やされます。人が近づけない危険物ですが、冷却を

続ければ四〇年くらいで空冷保管が可能になります。

2 使用済み核燃料には残った「減損ウラン」とプルトニウムが含まれています。セシウムやストロンチウム、そして超ウラン元素という強力な放射性物質など核生成物（死の灰）が含まれます。

3 燃料を覆っていたジルコニウムという丈夫な金属管ごと使用済み核燃料を切り刻みます。閉じ込められていた放射能が外に出ます。

4 硝酸で溶かし液体にします。（裁断金属管は分離し取り出す。硝酸は有機物があると火薬と同じ。）

5 プルトニウムとウランを分離し取り出し、

酸化物としプルサーマル発電用に保管される。

6 残った『高レベル放射性廃液』はセシウムやストロンチウムなどの「核生成物」と超ウラン元素など、最も危険な放射性物質で、まさに、死の灰が濃縮された液体です。「人がそばに近づけば死に至る。」一立方メートル漏れても青森、岩手は全員避難」という想像を絶する危険物です。

7 タンク（貯槽）に貯め

られた高レベル放射性廃液は絶えず冷却しなければ崩壊熱で沸騰します。水素が発生するので圧搾空気で掃気しなければ爆発します。

8 ガラス溶融炉は電気炉の一種で約一〇〇度の高温でガラスを溶かし高レベル廃液と混ぜて「ガラス固化体」を作ります。この工程がこの五年間、失敗を重ねてきましたが未だ見通しが立ちません。

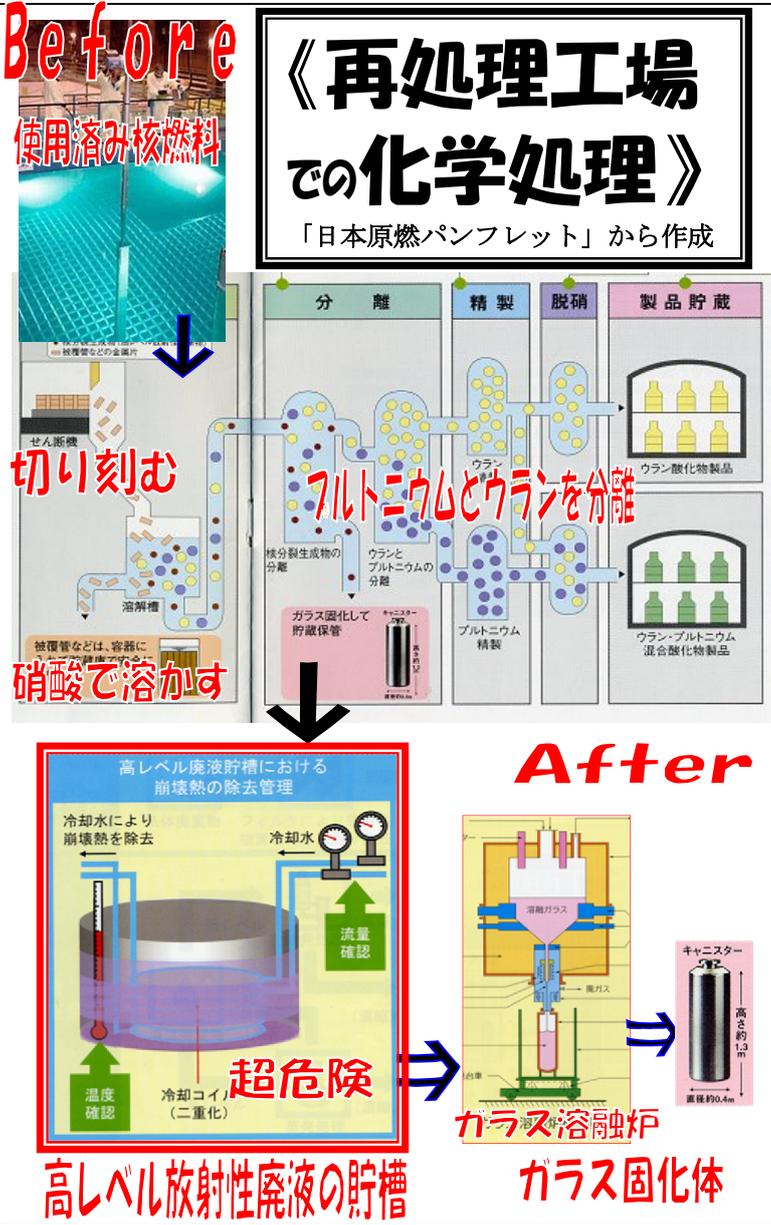
使用済み核燃料は『地上直接保管』へ

「高レベル放射性廃棄物」には「使用済み核燃料」と「高レベル放射性廃液のガラス固化体」があります。混同してはなりません。「高レベル放射性廃液のガラス固化体」は使用済み核燃料よりもさらに危険です。日本では現在固化体に出来ず暗礁に乗り上げています。中途半端な液体の「高レベル放射性廃液」は最悪の危険物です。

膨大な資金がかかり危険すぎる再処理をやめ、作ってしまった約一万七〇〇トンの「使用済み核燃料」は人間が絶えず監視しながら地上で安全に保管し続けるしか、方策はありません。

◆原子力発電は福島原発事故で明らかのように原子炉そのものが危険な装置です。それだけでなく、ウラン燃料は核分裂や中性子捕獲のたびにとんでもなく危険な放射性物質（「核のゴミ」）を生み出して行きます。

◆前号で、燃やす前のウラン燃料は、正しく防護すれば「手で持てる」が、原発で燃やしたあとは「使用済み核燃料」となり、直後は高熱と強い放射線で人が近づけず、プールで冷却するしかない。それが全国に約一万七千トンも溜まってしまったと書きました。その、使用済み核燃料を化学処理して、プルトニウムを取り出し、さらに「危険な高レベル放射性廃液」を残すのが「再処理工場」です。



日本には「高レベル放射性廃液」が茨城県東海村の『東海再処理工場』に394m³、青森県六ヶ所村『六ヶ所再処理工場』に202m³あります。これが電源喪失などで沸騰し漏れれば、東日本全域避難という最悪の事態も考えられます。

【前号の訂正】

第一三二号二面『計算してみよう』の記事の最下段で「生み出した危険物使用済み核燃料『2機で約200ト』と書きましたが正しくは『約67ト』です。毎年三分の一づつ交換して運転するので一年では三分の一です。もちろん、途中でやめても、装着された核燃料全体が「放射性廃棄物」になるのですが。